第 44 回
徳島大学薬学部 卒後教育公開講座
「現場の多職種連携」

主催：徳島大学薬学部

共催：徳島県薬剤師会　徳島県病院薬剤師会

協賛：社団法人日本薬学会

後援：徳島大学薬友会

2017 年 6 月 10 日（土）

於　徳島大学 長井記念ホール

第 44 回 徳島大学薬学部 卒後教育公開講座

「現場の多職種連携」

はじめに

本日は、本公開講座にご参加頂き、ありがとうございます。

様々な医療現場で、多職種連携の大切さが強く認識され、実行･展開されている一方、多くの困難や問題もあります。本公開講座では、大学病院や民間病院、在宅医療、臨床研究といった医療現場において、多職種連携の経験豊富な先生方をお招きし、その実情や展望などに関して、ご講演いただきます。立場や職種に関わらず、医療に携わる多くの皆様とともに、多職種連携に関する認識を深め、また活発な意見交換が出来れば幸いです。

担当世話人：笠原 二郎

徳島大学薬学部 神経病態解析学分野 准教授

プログラム

13:00 – 13:10
開会挨拶

13:10 – 14:00
平井 みどり　先生（神戸大学・名誉教授）
「高齢社会と多職種連携・地域連携」

14:00 – 14:50
林 秀樹　先生（ホウエツ病院・病院長）
「ホウエツ病院が取り組む多職種連携」

14:50 – 15:05
休憩

15:05 – 15:55
五反田 千代　先生（あわホームホスピス研究会・理事長）
「病気でも高齢でも豊かに生きる～多種異種チームで最期まで家での暮らしを支える～」

15:55 – 16:45
稲野 彰洋　先生（福島県立医科大学病院・臨床研究センター・副センター長）
「薬剤薬理学から臨床薬理学、そして東日本大震災復興へ」

16:45 – 17:00
総合討論･質疑応答･閉会挨拶

単位･ポイント付与情報

- 徳島大学薬学部能動学習単位（2 ポイント）
- 日本薬剤師研修センター認定薬剤師単位（2 単位）
- 日病薬病院薬学認定薬剤師単位*（2 単位）
- 徳島県病院薬剤師会生涯研修認定単位*（2 単位）

(*いずれか片方のみ認定)

講演要旨

「高齢社会と多職種連携・地域連携」

神戸大学名誉教授　平井みどり

未曾有の高齢社会となった現代日本、高齢者といえば反射的に「医療と福祉」の言葉が出てくる。しかし、老年学会が提唱しているように日本人は「若く」なっており、これまで65歳を高齢者と定義していたのが、現実とは合わなくなってきている。これまで「前期高齢者」と呼ばれていた世代は「準高齢者」と再定義され、75歳くらいまではそれまでと変わらない社会的活動が可能な人も多い。一方で、50代も半ばになると様々な身体的不調が顕在化する例もある。65歳以上の年代は「高齢者」といったひとくくりにできない、個人差が大きい年代と捉えた方がよさそうである。

若者以上に元気に活躍する高齢者が目立つ一方で、問題となるのは医療の必要な方々である。薬物治療が進歩したために、急性死亡が減って日本人は世界一の長生きとなった。しかし、その分加療中の人口は増えており、薬物治療に伴う様々な問題が話題にのぼっている。昨今、週刊誌等で断片的な情報が伝えられるため、薬物治療に対する誤った認識が拡がることに医療従事者は強い危惧の念をいだいている。また必要以上に薬が使用されることの弊害も明らかになってきた。このような背景に基づき、我々は2016年に「老年薬学会」を立ち上げ、先般5月14日には第一回の学術大会を開催した。厚生労働省でも、「高齢者医薬品適正使用検討会」が本年４月に設置され、高齢者が安全で有効な薬物治療をうけるために、医療・行政・社会が取り組むべき問題点について検討を開始している。一方で、「在宅医療」があたかもバラ色であるかのような論調が拡がっているのだが、現実はなかなか厳しい面も多い。高齢者を地域で支えるモデル「地域包括ケア」については、様々な成功例の報告はあるが、実際は進んでいない地域も多い。関わる職種が増えればふえるほど、コミュニケーションの齟齬が生じるため、解決すべき問題は山積であるが、医療・福祉・介護の担当者は皆、それぞれに頑張っている。連携のための工夫について、教育現場での実例を紹介する。さらに、個々人が自分の健康をまもるための情報提供と、意識改革が今後非常に重要になると考え、我々はあらたな活動を開始しており、その紹介も行いたい。

【プロフィール】

1974年　京都大学　薬学部製薬化学科　卒業（薬学士）
1985年　神戸大学　医学部医学科　卒業（医学士）
1990年　神戸大学大学院医学研究科博士課程修了　医学博士
1990年　京都大学医学部附属病院　薬剤部　文部教官
1995年　神戸薬科大学　助教授
2002年　神戸薬科大学　教授
2007年　神戸大学医学部附属病院　教授・薬剤部長
2017年　神戸大学　名誉教授　（4月より）

〈MEMO〉

「ホウエツ病院が取り組む多職種連携」

医療法人 芳越会 ホウエツ病院 理事長兼院長　林 秀樹

ホウエツ病院は、総病床数 65 床の民間二次救急病院です。内訳は、一般病床 30 床、地域包括ケア病床 13 床、回復期リハビリテーション病床 22 床となっています。入院患者の平均年齢は 76,5 歳と高齢であり、呼吸器疾患・脳血管疾患といった慢性疾患の患者が多く見られます。

職員数は、平成 29 年 4 月現在で約 150 名、65 床規模の病院としては多いかもしれません。当院は、救急医療・回復期病棟・地域包括ケア病棟・災害医療など、様々な取組みを行っていますが、小規模医療機関であるゆえにあらゆるスタッフが役割を兼務しています。スタッフが兼務している事が非常に重要な要素であり、当院の人事の特徴ともいえます。 今回は、当院の特徴ともいえる多職種連携に焦点を置き、ホウエツ病院だからこそできる多職種連携のあり方をご紹介したいと思います。

【プロフィール】

昭和 54 年 川崎医科大学卒業後、徳島大学医学部第三内科（現　呼吸器膠原病内科）に入局。平成 10 年 3 月に医療法人芳越会理事長に就任、平成 13 年 8 月医療法人芳越会ホウエツ病院院長を併任し現在に至る。

資格としては日本胸部疾患学会認定医、日本内科学会認定内科医の認定をうけ地域医療を中心に活動している。

所属学会は日本胸部疾患学会、日本内科学会、日本集団災害医学会、へき地離島救急医療学会等、様々な活動を行っている。

平成 24 年 6 月に厚生労働省災害派遣医療チーム（DMAT）研修を終了し日本 DMAT 隊員として登録され平成 26 年 1 月 DMAT 統括となる。また全日本病院協会の救急防災委員として災害時の医療対応全般の役割を担っている。

近日起こると予測される南海トラフ沖地震に際して、地域医療を軸とした災害医療実現に向けて現在取り組んでいる。

〈MEMO〉

「病気でも高齢でも豊かに生きる
～多種異種チームで最期まで家での暮らしを支える～」
あわホームホスピス研究会 理事長　五反田 千代

病気や高齢になっても、豊かに暮らすための秘訣は、在宅医療福祉の専門職の支援とその人それぞれの暮らしの中で培ってきた地域の中での関係性が続いていくことです。そのために、異種多種の様々な技術や立場をもった人たちが、尊重しあって、同じ目標に向かっていくことが重要です。良いチームとは、互いの顔や名前を知っているだけでなく、各自の役割を果たしながら、お互いを信頼してサポートします。

多職種連携とは、あくまでも、一人のひとの望みをかなえるための手段です。

【プロフィール】
資格　看護師・保健師・助産師・精神保健福祉相談員・介護支援専門員
出身　徳島県小松島市

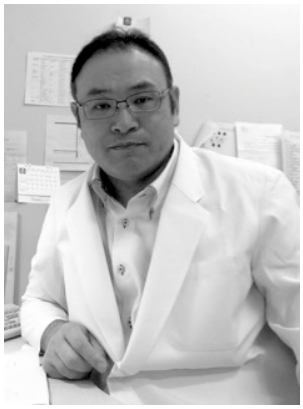
聖路加看護大学卒業（日野原重明氏に師事）
虎ノ門病院急性期病棟勤務（3 年）
東京都調布市役所勤務（保健師業務 25 年）
2011 年 8 月～2012 年 3 月
　於：NPO 法人どりーまあサービス勤務
　「支え愛コーディネーター育成事業」に従事
2013 年 7 月～
特定非営利活動法人あわホームホスピス研究会設立　理事長として現在に至る。

★ボランティア活動★（東京都にて）
@ケアタウン小平デイサービス（4 年）
@ケアーズ（株）白十字訪問看護ステーション
「暮らしの保健室」設立準備事務局（2011 年）

〈MEMO〉

「薬剤薬理学から臨床薬理学、
そして東日本大震災復興へ」

福島県立医科大学病院 臨床研究センター 副センター長
稲野 彰洋



私は 1995 年に薬学部を卒業、薬剤師免許を取得後、病院薬剤師、大学院、臨床開発業務などを経験しながら、現職となった。学問的な話ではなく、あなたは何ができるのか？と、問われ続けた卒後 20 年であった。

富山医科薬科大学附属病院薬剤部時代は、病棟業務という薬剤師業務が開始されたばかりであった。多くの薬剤師が新しい業務に躊躇し、医師･看護師との連携に戸惑う時期に薬剤師としてのキャリアをスタートさせた。ミネソタ大学薬学部、金沢大学と薬物動態学を中心にした基礎研究の後、再び臨床に近い仕事を得ることとなった。それはトランスポーター研究が基礎から臨床でのエビデンスに拡大しつつある時期で、臨床開発における早期探索臨床試験が見直されている時期でもあった。恩師の辻 彰教授と共に NPO 法人を運営することになり、臨床研究コーディネータとして看護師、研究事務局員を雇用し、地元医師会、地域病院、クリニックと多くの医療関係者を巻き込むようになった。

臨床エビデンスを構築できる臨床薬理試験への興味が高まり、大分大学での Pharmaceutical Medicine や Microdose 試験に直接関わることとなった。研究者（製薬企業、大学)、医師、薬剤師、看護師、検査技師、事務員などの混成職場で薬剤師はごく少数となっていった。業務のほとんどが研究企画やプロトコル立案などのデスクワークとなった。教育研修も含めて不思議と薬剤師は使える立場にいるようだ。

現在所属している福島県立医科大学では着任直前に東日本大震災が発生、さらに未知の分野を進むことになった。現在進めている、新しい内照射治療等についてもご紹介したい。

【プロフィール】
1972 年 1 月生まれ　静岡県浜松市出身
1995 年 3 月　富山医科薬科大学薬学部卒業
2003 年 9 月　金沢大学大学院博士課程修了（薬学博士）
2011 年 4 月　福島県立医科大学　着任
現在
福島県立医科大学病院　臨床研究センター　副センター長（病院教授）
福島県立医科大学　医療研究推進センター　准教授

〈MEMO〉

お知らせ

・ 受付にて、アンケート用紙を配布しております。ご記入の上、お帰りの際に受付にて回収いたしますので、ご協力の程をよろしくお願い申し上げます。

・ 懇親会は、18 時から秋田町･相撲茶屋両國にて開催します（要事前予約)。詳細は担当世話人にお尋ね下さい。

平成 29 年度　第 44 回　徳島大学薬学部 卒後教育公開講座 実行委員会

連絡先：〒770-8505 徳島市庄町１丁目 78－1

笠原 二郎　（徳島大学薬学部 神経病態解析学講座）

Tel: 088-633-7278　Fax: 088-633-9512

E-mail: awajiro@tokushima-u.ac.jp